

涼やかな草原

しづやりふかふ

丞左衛門殿に於かれてはさぞかし御落胆のことと慮られた。そろそろ日も暮れよう。道を急ぐ。かつて世のため人のために大義を成し遂げんとした烈士を想い。

困苦を顧みず、私財を棄てるかのよう注ぎ込み、精力の全てを傾け、人生を投じ、日の本一の大伽藍を建て天下国家の真義たる礎とし、国王を大いに安堵し、民を慰撫し、かんながら惟神を全うし、御仏を供養して、太道に大いに尽くして天下第一の偉業を果たさんと、正義に燃え、又僧侶良安という師にも廻り逢え、大商人太井嘉兵衛の知遇と援助とを得て、天下人のお赦しも戴けたというに、さて、事業を始めようとすれば、疫病に嘉兵衛は斃れ、財の基礎が挫かれながら死力を尽くして伽藍の基礎を築き、柱を建て瓦葺くも、大火熾りて良安師と完成間近の建築を焼き尽くし、金銭も精神の支えも物資も喪い、ついに絶望の淵なりしと聞き、同郷の身たる者、訪ね措かずに居られず、推参し奉りし次第、さて、いかがなものか。いやはや、面妖な。

丞左衛門殿は方丈に畳みを敷き、涼やかに過していた。裏小屋のかまどで米を炊き、一汁一菜の日々。竹筒に白湯を入れて飲みつつ、簡素だが清潔な着物にてよく磨かれた縁側に坐し、茫洋たる面でスキの原の夕暮れを眺めている。

「いいや、惣之助殿さようなことはないのだよ。むしろ何かから解放されてすっきり軽くなってしまった。さらさらして、きよらで、ひろやかで。…暮らしてこれで不自由ない。師と友の冥福を祈って追善するのみ。あとはつつましく過しているよ。」

あゝ、何とも清々しい、さっぱりとした良い気持ちなのだよ。全てから解放放たれて。何とも言えず、澄み切ってかららかなのだ。どう言えはよいのだろ。言葉が見つからない。

あの頃は神々しいものへの畏敬、雲をも凌ぐ高みに達して見渡す崇高感、聖なる感情に貫かれ奮い立ち、大いに充実していたが、今のこの清明なる歓びに比べたら息苦しいような狭い架空の球体の中に閉じ込められ、ぎこちなく硬い体で、常に胸重たく呼吸していたなと思えばかりだ」